

# 小田原文学館 没後 70 年記念特別展

## 「北原白秋 -小田原での日々-」

開催にあたって

詩人・北原白秋（本名・<sup>りゅうきち</sup>隆吉。明治 18 年（1885）1 月 25 日～昭和 17 年（1942）11 月 2 日）は大正 7 年（1918）3 月、小田原に移り住みました。

小田原文学館ではこれまで、小田原ゆかりの文学者である白秋を常設展示で紹介するとともに、平成 10 年（1998）には白秋童謡館を開設し、白秋の業績を顕彰してきました。本展は没後 70 年を記念して、小田原時代を中心に白秋の業績やさまざまな人びととの交流を紹介するものです。

白秋は小田原居住時代に<sup>すずきみ えきち</sup>鈴木三重吉が創刊した雑誌『赤い鳥』の童謡・児童詩欄を担当して多くの童謡を発表しました。白秋は後に「小田原は全く私にとりましては、生れた土地、母の里について最も懐しく、また最も意義深い藝術の母胎」と述べており、小田原時代は白秋を考える上で重要な時期といえるでしょう。

本展が、白秋作品の魅力に触れるとともに、白秋をはじめ数多くの文学者が居住した小田原の歴史や文化に、より興味を深める機会となれば幸いです。

平成 24 年 10 月 小田原文学館



小田原時代の白秋

# 第一章 白秋、登場

北原白秋は明治18年(1885)、福岡県山門郡沖端村(現・柳川市)に生まれました。文学少年として『明星』などに影響を受けた白秋は、明治37年(1904)に上京して多くの詩作を行うとともに『中央公論』などに活躍の場を広げました。その後詩集『邪宗門』・『思い出』、歌集『桐の花』などを刊行して文壇での地位を確立するとともに、画家の石井柏亭、詩人の木下杢太郎らと芸術家のサロンである「パンの会」を結成し交流を深めました。

明治45年(1912)の松下俊子との恋愛事件後、三浦(現・三浦市)・小笠原諸島など各地を転々としながら、『雲母集』・『雀の生活』などの作品で、新たな作風を切り開きました。

本章では、白秋の作品を通じて小田原時代以前の白秋の業績を紹介します。

※本章の資料は全て当館蔵(石丸氏寄贈)

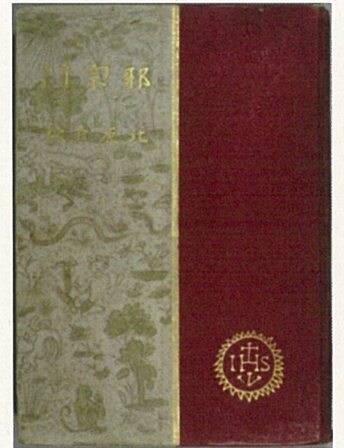
## 1-1:『邪宗門』(初版、易風社、明治42年(1909))

白秋が24歳のときに発表した第一詩集で、明治39年(1906)4月から明治41年(1908)の間に書かれた作品が収録されています。

例言には「編纂に際しては特に自信ある代表作のみを精査」と書かれており、「時代を画するほどの処女詩集で無ければ世に問うものではない」と考えていた白秋の意気込みがうかがえます。

当時、詩の分野では、客観的な描写よりも主観的態度を重んじ、情緒を象徴として表現する象徴詩の流れが盛んになっていました。白秋もこの作品において、「詩の生命は暗示にして単なる事象の説明には非ず」と主張しています。白秋と交流があった歌人・石川啄木は、この作品について「新しい感覚と情緒」が溢れ、「今後の新しい詩の基礎となるべきものだ」と記しており、文壇に与えた影響がうかがえます。

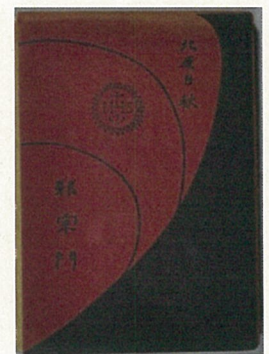
なお、装丁は画家の石井柏亭によるもので、「色洪き更紗模様」と「南蛮寺鐘の紋章」(イエスを示す「IHS」のマーク)が特徴です。白秋は後に「当時の詩集としては革命的なものであった」と記しています。



## 1-2:『邪宗門』(再版、東雲堂書店、明治44年(1911))

『邪宗門』の再版本で、第二詩集『思い出』第四版の発行を契機に再版されたものです。白秋は『邪宗門』と『思い出』について、「両々相俟ちて初めてわが第一期の詩風を完全に代表するもの」と記しています。

なお、再版の装丁は高村光太郎が手掛けています。白秋は装丁を変えたことについて「一つには数少き初版の匂いを愛惜したると、また一つには更に別様の爽かさを望むわが移り気の試みに外ならず」と述べています。

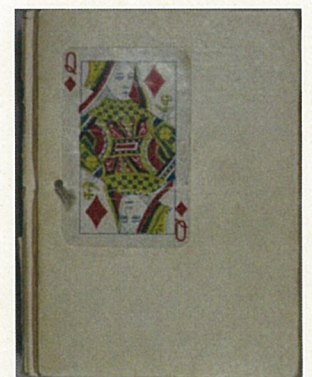


## 1-3:『思ひ出』(アルス、大正14年(1925))

白秋26歳の時に発行された第二詩集の増補新版(初版明治44年(1911))で、「自分に親しみの深い、幼い時代の『思ひ出』をここに集めた」ものです。

巻頭には「自叙伝として見て欲しい一種の感覚史なり性欲史に外ならぬ」と記されています。生まれ育った柳川での日々を綴った序文「わが生ひたち」を冒頭に、小唄・民謡といったさまざまな技法によって、柳川の風土や自らの幼少期の生活が表現されています。

この詩集は、出版記念会で評論家の上田敏に「あれ(序文)を読んで落涙した」と激賞されました。白秋は後にこの作品について「確かに私の出世の機縁を開いてくれた」と振り返っています。また白秋は、大正14年(1925)に発行された増補版に「この『思ひ出』こそは今日の私の童謡の本源を成したのもの」と記しています。



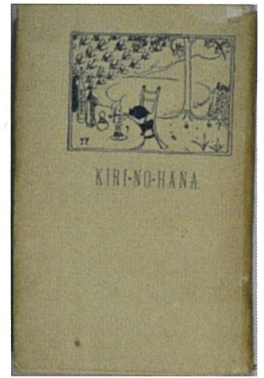
## 1-4: 『桐の花』 (東雲堂書店、大正2年(1913))

白秋 28歳の時に発行された初めての歌集です。

短歌約 400 首と短歌についてのエッセイ風の文章が収められています。白秋は「私の歌にも欲するところは気分である、陰影である、なつかしい情調の吐息である」と述べて、伝統的な日本の形式である短歌にヨーロッパの精神を盛り込みました。

発行当時は「非日常性と異国趣味」が評価され、歌人としての白秋も注目を集めました。

本書の装丁・挿絵は白秋自身が手掛けています。「桐の花とカステラ」「銀座」といったテーマごとに、自身が描いたカラー挿絵の紙片が貼り付けられており、白秋の装丁へのこだわりがうかがえます。



## 1-5: 『雪と花火』 (東雲堂書店、大正5年(1916))

白秋 28歳の頃の第三詩集です。発行時(初版大正2年(1913))には『東京景物詩及其他』という題名でしたが、第三版発行にあたり改題されました。

作品中には「電気灯」「瓦斯」「メリイゴウラウンド」といった言葉が使われるとともに、木下杢太郎による挿絵には「パンの会」が催された隅田川で女性と舟遊びをする洋装の男性が描かれており、文明開化によって日本に入ってきた新しい文物への白秋の関心がうかがえます。

巻末で白秋は「ああ、東京、東京、その名を呼ぶさえ私は涙が流れる。(略)私は流離して留まるところを知らない」と記しており、当時の白秋の心境の一端がうかがえます。



## 1-6: 『真珠抄 印度更紗 第一集』 (金尾文淵堂、大正3年(1914))

白秋 29歳の時の第四詩集で、「子ども」「深夜」「玉蜀黍」といった身近なテーマを取り上げています。あとがきに「本集以後各月一集を上梓し、(略)印度更紗の模様の如くわが愛慕する人々の書架にかなしく入り乱しむべし」と記されていることから、白秋がシリーズ化の構想を持っていたことがわかります。

この作品集で白秋は「短唱」という形式を自ら提唱し、「詩形極めて短小なれども、(略)自由にリズムの瞬きを尊重し、(略)純中の純なる単心の叫びを幽かに歌ひつめんとするなり」と述べています。

それまでの白秋の象徴詩は、多くの言葉を尽くして表現するものでしたが、ここでは逆に言葉を削る表現方法を見出しました。詩人の堀口大學はこの詩集について、新たな象徴詩の技法を作り出すとともに、日本独特の美を表現しているとして高く評価しました。

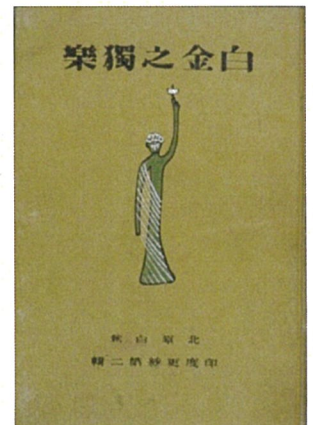


## 1-7: 『白金之独楽 印度更紗 第二集』 (金尾文淵堂、大正3年(1914))

『印度更紗』の第二集です。

この作品は、「『真珠抄』に見えた一派の宗教味を更に強調しようとした」もので、恋愛事件に端を発した苦悩を通過した悟りの境地が、回転するコマやブッダ、イエス、化学物質のラジウムなどに例えて表現されています。全文が漢字カタカナ交じり文で書かれており、仏教の経典を思わせる表現が特徴とされています。

この詩集には、バラが咲く様子を題材にした作品が収録されています。この作品について白秋は「冬の枯れすがれた薔薇の木の小脇からあの真紅な薔薇の花が咲きひるがえる目の前の不思議さを、(略)私はハッと驚いたがゆえ涙がながれた」と後に記しており、白秋が身の回りの当たり前のことに新鮮な驚きを感じるとともに、それを作品にするという創作方法を見出したことがうかがえます。

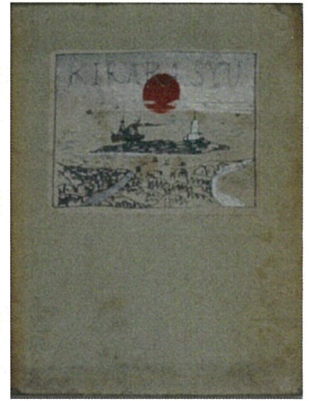


## 1-8:『雲母集』(阿蘭陀書房、大正4年(1915))

白秋30歳の作で、『桐の花』に続く第二歌集です。白秋とその弟鉄雄が作った出版社(後のアルス)から発行されました。

この作品集は、三崎での生活で接した風物が「三崎新居」「雲母雲」「自然静観」「地面と野菜」などのテーマに沿って表現されています。

それまで題材として目を向けていなかったキャベツや地面、小便といったものを取り上げている点が特徴で、白秋自身はこの歌集で『桐の花』の作風から脱却することを意図していたようです。

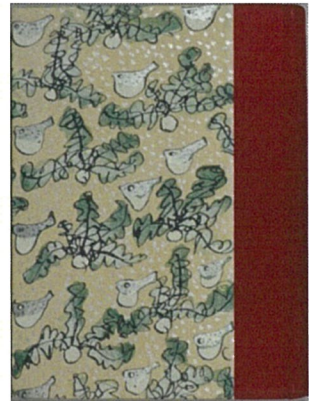


## 1-9:『雀の生活』(新潮社、大正15年(1926))

白秋35歳の時に発行された長編散文詩集(初版大正9年(1920))で、二番目の妻・章子あやことともに葛飾に住んでいた時期の作品です。

この頃の白秋の生活は困窮を極めていたとされ、「主題は雀の生活ではあるが、貧しい者の霊の記録である」という記述からは、当時の生活を題材としたことが分かります。

白秋は巻頭で「雀を観る。それは此の「我」自身を観るのである。(略)一個の雀に此の洪大な大自然の真理と神秘とが包蔵されている」と記しており、雀に自分の姿を託して一体化することで自然の真理を表現しようとする作風を見出したことがうかがえます。また、白秋はこの詩集について「一期を画したもので(略)雀と生活した葛飾しえんそうしやの紫煙草舎時代に声を発し、その以前の麻布時代、後の小田原時代にまで翼を広げている」と後に記しており、白秋自身にとって画期となる作品だったといえます。



## 第二章 童謡の世界

白秋は大正7年(1918)3月、東京から小田原に転居しました。

同じ頃、鈴木三重吉に誘われて雑誌『赤い鳥』の童謡・児童詩欄の担当となったことをきっかけに、白秋は本格的に童謡の創作を始めました。白秋はそれまでの学校唱歌を「不自然極まる大人の心で詠まれた」と批判し、純粋無垢な子どものような感受性を大切にすべきとして、「からたちの花」「待ちぼうけ」といった名作童謡を世に送り出しました。これらの童謡は音楽とともに現在まで多くの人に歌い継がれています。また、イギリスの童謡「マザーグース」を訳して初めて本格的に日本に紹介したことも、白秋の小田原時代における大きな業績といえます。

本章では、白秋の小田原時代の中心的な活動である童謡を中心に、その作品世界と広がり的一端を紹介します。

### 雑誌『赤い鳥』について(展示番号2-1)

鈴木三重吉が主宰して大正7年(1918)~昭和6年(1931)に発行された児童雑誌です。

三重吉は当時流行していた子ども向けのお伽噺とぎばなしや学校で教えられていた唱歌などを否定して「芸術として真価ある純麗な童話と童謡」を提唱するとともに、これに対して芥川龍之介あくたがわりゅうのすけ・島崎藤村しまざきとうそんといった、当時大人向けの文学の世界で活躍していた作家たちが賛同・寄稿しました。

当時の日本では、子どもの自発性や個性を尊重しようとする自由教育が提唱されていました。この流れが『赤い鳥』の方針と合致していたことなどから、西洋文化を摂取していた都市部の中間層を中心に『赤い鳥』は支持を集めました。最盛期に発行部数が3万部を超えるとともに、『金の星』など多くの類似雑誌が出現し、『赤い鳥』は大正期の児童文学に大きな足跡を残しました。

白秋は三重吉の依頼により創刊当初から童謡・児童詩欄を担当しました。自ら童謡を寄稿するとともに、投稿される作品の選定も行い、後進の育成にも力を入れるなど重要な役割を果たしました。

## 2-2:『赤い鳥』鈴木三重吉追悼号(復刻版)(昭和11年(1936))

当館蔵

三重吉の死後に刊行された追悼号で『赤い鳥』に関わった人びとが多く寄稿しています。

白秋も追悼文を寄稿しており、「此の痛惜の念は白秋私ほど深甚な者はあるまい」「最も主要な精神を成したのは、三重吉と白秋との提携であり、童話と童謡との合流であった」と記しています。

また、『赤い鳥』について回想した別の文章では「自身の詩業の一つとして、此の童謡の道をも開拓し得たことの結縁が実に此の赤い鳥にあることを悉く思う」と述べており、白秋の『赤い鳥』への思いの深さがうかがえます。



## 2-3:『トンボの眼玉』(アルス、大正8年(1919))

当館蔵

白秋34歳の時に発行された第一童謡集で、『赤い鳥』に発表されたわらべ唄調の作品を中心に収録したものです。「赤い鳥小鳥」「あわて床屋」など、なじみのある作品が多く見られます。

この作品集の冒頭には長文の「はしがき」があります。「ほんとうの童は何よりわかりやすい子供の言葉で、子供の心を歌うと同時に、大人にとっても意味の深いものでなければなりません」という一節からは、白秋が目指す童謡の理想像がうかがえます。また自身の近況について「私はその罪のない子供たちの笑い声の中に交って、いつも童謡の中の世界で子供らしく遊んでいます」と記しており、充実した創作活動の様子が分かります。



## 2-4:『白秋小唄集』(復刻版)(アルス、大正8年(1919))

当館蔵

白秋34歳の時の作品集で、『邪宗門』や『思ひ出』などそれまで発行してきた作品の中から「主として、民謡の風脈を帯びた解し易い」ものが収録されています。

白秋は巻末の「覚え書」で「小唄は(略)私の詩風の基調を成すものである。今日に於いて純日本的な新しい民謡は必ず生まれて来なければならない機会にある。(略)現代のわが民族の言葉を決して粗末にしてはならないのである。私は今後も更に新しい民謡を作るであろう」と記しており、白秋の民謡に対する考え方がうかがえます。

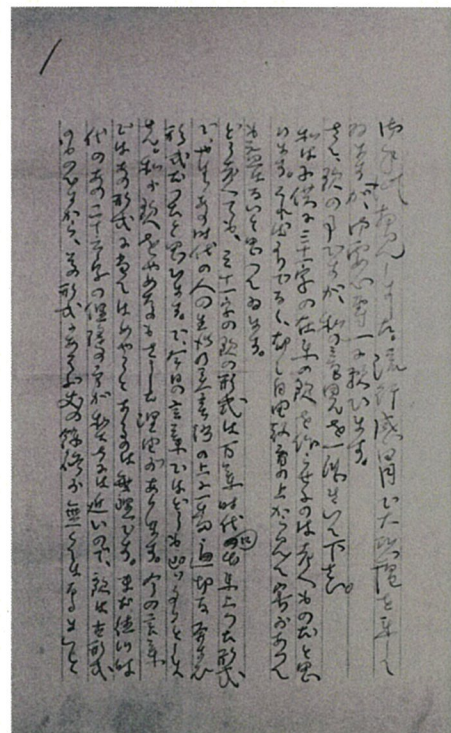


## 2-5:鈴木三重吉あて書簡 県立神奈川近代文学館蔵

白秋から三重吉にあてた書簡です(大正9年(1920)1月23日。翻刻は『白秋全集』(岩波書店)35巻245~249頁掲載)。

短歌を子どもに作らせることは自由な発想の妨げになると反対するとともに、童謡に曲をつけることへの違和感を表明しています。また、他の童謡作家の作品への批評も行っています。

当時、西条八十の「かなりや」に成田為三が曲をつけた楽譜が『赤い鳥』に掲載されて好評を得たことから、童謡に曲をつけることが広まりました。白秋はこの書簡で、日本的であるべき童謡に、西洋の旋律を取り入れて曲をつけることに反対しており、白秋の童謡に対する考え方がうかがえます。また、「童謡と民謡を一生の大事業にしようと思います」という一節もあり、白秋の童謡に対する熱意が読み取れます。



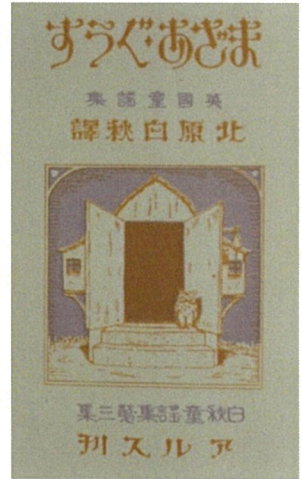
三重吉は『赤い鳥』創刊に際して執筆した「創刊に際してのプリント」で、「ただ見たまま、聞いたまま、考えたままを、素直に書いた文章をお寄せ下さい」と記しており、子どもを規範に当てはめるのではなく、子どもが持っているものを尊重しようとする姿勢がうかがえます。

また白秋は『赤い鳥』の選評で「童謡は昔から子供が自然と歌い出したものは実にいいのがあります。(略)思いきり子供になって簡単に歌うことです。(略)すっかり子供に還って歌ってください」と記しており、三重吉と白秋の童謡への考え方に共通点があったことが読み取れます。

2-6-1:『まざあ・ぐうす』(アルス、大正10年(1921)) 当館蔵(石丸家寄贈)

白秋36歳の時の作品集です。イギリス童謡「マザーグース」を日本で初めて本格的に訳したものとされています。白秋は翻訳に際して、「手拍子足拍子で歌うべきものであるので、訳もまた極めて民謡風の動律で、全然歌うようにしなければならぬ」と述べており、リズム感を大切にしていたことが読み取れます。

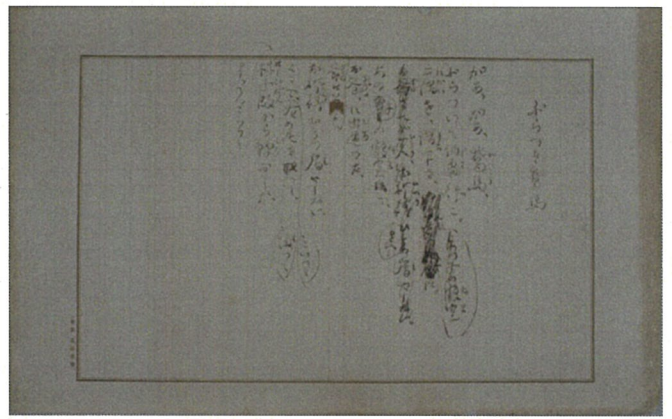
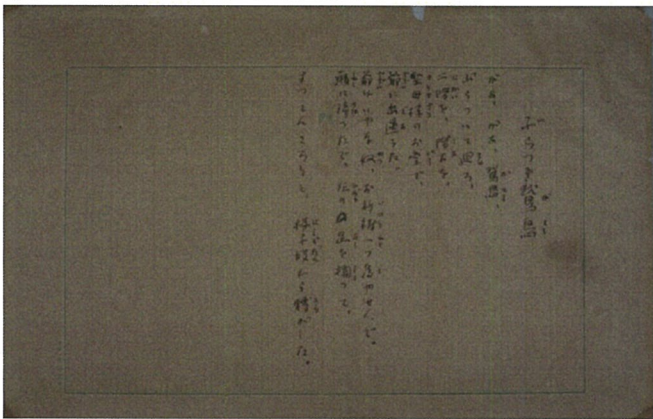
白秋はこの作品で「洋の東西を問わず子供の感情乃至感覚生活と云うことについては殆どおなじだということに驚かされた」と記すとともに、マザーグースの内容について「日本の子守唄のようなほんとしみじみとしたあの人情味に欠けてはいしまいか(略)私は日本在来の民謡やそうした子守唄のありがたさをつくづくと顧みたと述べています。白秋が翻訳を通して、日本の民謡に改めて価値を見出したことがうかがえます。なお、この作品集では、白秋が住んでいた小田原の「木兎の家」をモチーフにした扉絵(恩地孝四郎作)が使われています。



2-6-2:「ぶらつき鷺鳥」原稿 当館蔵

『まざあ・ぐうす』に収録されている「がアがア、鷺鳥」の元になった原稿です。

「うろついて」が「ぶらついて」へ、「ご祈祷」が「お祈り」へと変わっているなど、白秋が推敲を重ねて作品を生み出していたことがうかがえます。



2-7 『詩と音楽』十一月号(アルス、大正11年(1922)) 当館蔵

白秋・山田耕筈を主幹として、「詩と音楽の両者を、完全に、有機的に融合せしめる」ことを目的に創刊された雑誌です。執筆陣は三木露風や前田夕暮といった詩人や歌人、近衛秀麿などの音楽家と幅広く、詩と音楽を芸術的に融合させようと試みた点で画期的な雑誌とされています。

展示しているのは「民謡童謡号」です。耕筈はこの号で「子供の心を持った作曲者が(略)意図なしに生んだ歌謡こそは(略)真の芸術的童謡であるにちがいありません」と記しており、白秋の童謡に対する考え方との共通点がうかがえます。

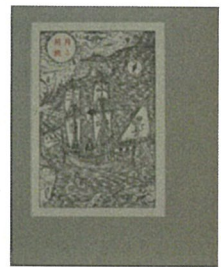
白秋は当初、詩や童謡に曲をつけることに反対していましたが、耕筈とのコンビで多くの作品を送り出しました。後に白秋は、耕筈について「音楽家にして君ほど詩を理解する人は少い。私が常に提携する理由は一にここにある」と述べており、耕筈への信頼が読み取れます。



2-8 『月と胡桃』(復刻版)(アルス、昭和4年(1929)) 当館蔵

白秋44歳の時に発行された、大正期の童謡としては最後の作品集です。

白秋はあとがきで「わたくしの童謡が(略)童心童謡の歌謡として整えられてはあっても、その歌謡はいつとなく詩の一義へ進みつつある」「児童のみならず寧ろ少年以上の成年にも見てほしい集」と記しており、童謡から詩へと表現方法が変化していることや、想定している読者の年齢が上がっていることが読み取れます。



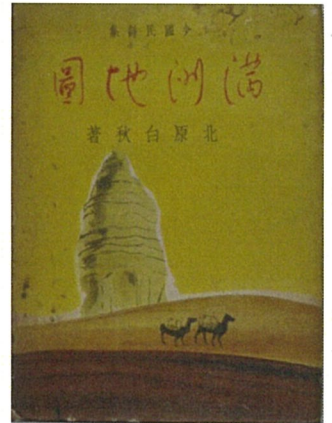
2-9 『少国民詩集 満洲地図』(フタバ書院成光館、昭和17年(1942))

当館蔵(石丸家寄贈)

白秋57歳の時に発行された、童謡・童詩集としては生前最後の作品集です。

「大連から奉天の北まで」「奉天から安東まで」「四平街から内蒙古まで」「新京から国境まで」と五つのテーマに沿って作品が収録されており、満洲を旅行するような配置になっています。白秋はあとがきで「満洲の風土、民俗、季節、伝説にわたり、日露役より満洲事変、現下の大東亜戦争を織り交ぜ、地理的にも歴史的にも少年の生活感情に結びつけようとするもの」とこの詩集を位置付けています。

大正期最後の童謡集となった『月と胡桃』以降、白秋はいったん童謡の創作から遠ざかりました。しかし、死の前後にこの作品集をはじめとして、8冊の童謡や少国民詩集が発行されており、戦争を賛美する内容になっています。その一方で、白秋は弟子に対して「軽々しく時局便乗的な作歌をするな」と戒めたと言われています。



### 第三章 小田原での日々

白秋は大正7年(1918)3月、妻・章子の療養のため小田原に転居し、大正12年(1923)に起こった関東震災により家が半壊したことをきっかけに大正15年(1926)に東京へ転居しました。

白秋は大正10年(1921)に3番目の妻である佐藤キク(通称・菊子)と結婚するとともに、大正11年(1922)には長男・隆太郎、大正14年(1925)には長女・篁子をもうけました。

また、小田原時代の白秋は童謡に留まらず、歌人・前田夕暮らとともに短歌雑誌『日光』を立ち上げたり、小田原に居住していた後の詩人・藪田義雄と出会うなど幅広く活動しました。

本章では、白秋が小田原時代に居住した場所の様子や、さまざまな人びととの交流の足跡を紹介します。

#### ●白秋が住んだ小田原●

白秋は大正7年(1918)に小田原に移り住んだ当初、御幸ヶ浜(現・小田原市本町)にあった旅館・養生館に滞在しました。その後、十字町(現・小田原市南町)のお花畑に住むとともに、同年10月には天神山(現・小田原市南町)の伝肇寺に移りました。

この地で白秋は、寺の境内に茅葺の家を建てるとともに、山荘を建て、東京に転居するまでの8年間生活しました。特に自ら「木兎の家」と名付けた茅葺の家は、白秋のエッセイや作品、葉書などにたびたび取り上げられており、小田原の地への愛着がうかがえます。

3-1-1 : 白秋と隆太郎 当館蔵

白秋と隆太郎の写真で、自宅近くの天神山付近で撮影されたものです。



3-1-2 : 隆太郎似顔絵 当館蔵

白秋が描いた隆太郎の似顔絵です。右上部分に「りう坊」と書かれており、白秋の隆太郎への愛情がうかがえます。



3-1-3: 木兎の家 当館蔵

白秋が住んだ木兎の家の写真です。大正8年(1919)夏、白秋は三重吉らの資金援助を受け、伝肇寺東側の竹林に住居と書斎を建てて移り住みました。



住居の方は茅を使って屋根と壁を覆い、「鼻のような入口の両側に、眼のような二つの青硝子入の小窓がついた正面は木兎の家そのままに見える」ことから「木兎の家」と命名したと、白秋は後に記しています。

白秋は、木兎の家をモチーフにした絵を自作の扉に使うとともに、自ら家の外観を絵に描いて年賀状にも取り入れており、木兎の家への愛着がうかがえます。

3-1-4: 山荘の様子(年不明) 当館蔵

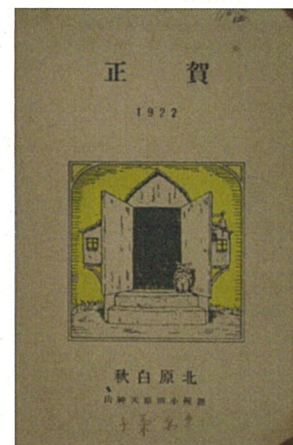
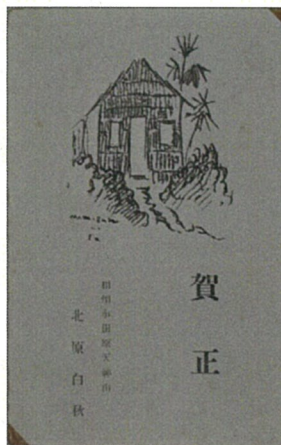
白秋が大正9年(1920)に木兎の家の隣に建てた3階建ての山荘の写真です。この山荘を建てる際に行った地鎮祭で、白秋と当時の妻・章子との間でトラブルが起き、これをきっかけに二人は離婚しました。



3-1-5: 年賀状(西村隆一<sup>にしむらりゅういち</sup>あて、2通) 当館蔵

白秋の年賀状です(大正11年(1922)1月1日・大正14年(1925)1月6日)。どちらの葉書にも木兎の家が印刷されています。

西村隆一は白秋が小田原に移り住んだ際、最初に<sup>どうりゅう</sup>逗留した養生館の持ち主で、白秋とも交流がありました。



立			献					
一 加	一 菓	一 クリーム菓子	一 京鶏	一 西洋	一 牛	一 鱈	一 鮮	一 清
		子	丸	獨	肉	汁	魚	
		菓	活	煮	入	揚	蒸	
		物	寄	込	揚	物	焼	汁
		球	物					

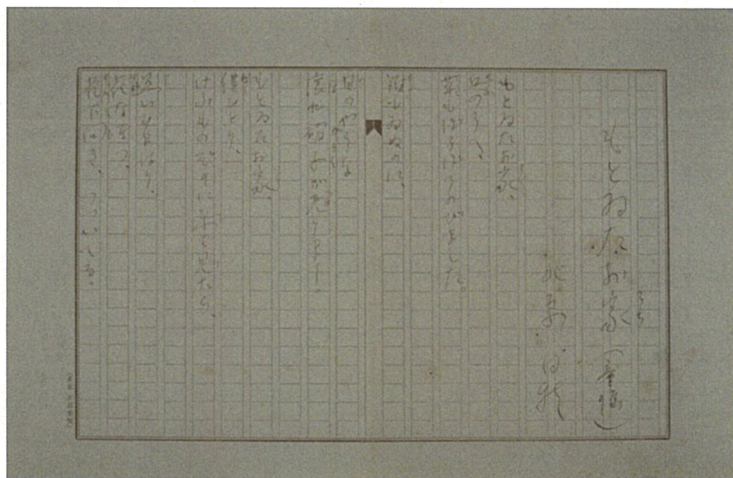
北原 両家結婚式宴  
大正十年四月廿八日  
於 木兎の家

3-1-6: 結婚式メニュー 当館蔵

白秋が大正10年(1921)に佐藤キクと結婚式を挙げた際の食事メニューです。清汁(すまし汁)から食後のコーヒーまで九品が出されたことが分かります。なお、メニューの中にある「西洋独活」はアスパラガスのことです。

3-1-7: 「もとゐたお家」原稿 当館蔵

小田原の旧居について歌っており、『赤い鳥』に掲載されました。





## ●さまざまな交流●

ここでは、白秋の小田原時代の交流の一端を、前田夕暮・河野桐谷・薮田義雄の三人を取り上げて紹介します。

秦野市出身の歌人・前田夕暮（本名・洋三。明治16年（1883）～昭和26年（1951））は、<sup>わかやまぼくすい</sup>若山牧水とともに自然主義（空想ではなく現実の生活やそこでの実感を題材にする）の歌人として知られ、詩人・萩原朔太郎など多くの後進を育てました。夕暮と白秋は、大正12年（1923）に電車内で偶然に会って意気投合し、そのまま三浦半島を旅して以来、交流を深めるようになりました。後に共同で短歌雑誌『日光』を創刊し、好評を得ました。

小田原に居住した美術評論家・河野桐谷（本名・譲。明治12年（1879）～昭和19年（1944））は東京専門学校（現・早稲田大学）で演劇を研究し、<sup>こくちゅうかい</sup>翻訳劇を発表するとともに国柱会の機関誌を編集、美術評論も行うなど幅広く活動しました。白秋とは、白秋の弟・鉄雄が立ち上げた出版社・アルスなどで活動をともにしていたようです。白秋の3番目の妻・キクは桐谷の妻・喜久子と同級生で、白秋は桐谷夫妻の媒酌によりキクと結婚しました。

詩人・薮田義雄（明治35年（1902）～昭和59年（1984））は大正7年（1918）、小田原中学校（現・神奈川県立小田原高等学校）在学中に白秋と出会って弟子入りし、後に白秋の秘書も務めるなど長い間白秋と関わりがありました。詩作とともに『評伝 北原白秋』『随筆 北原白秋』など白秋に関する著作があります。

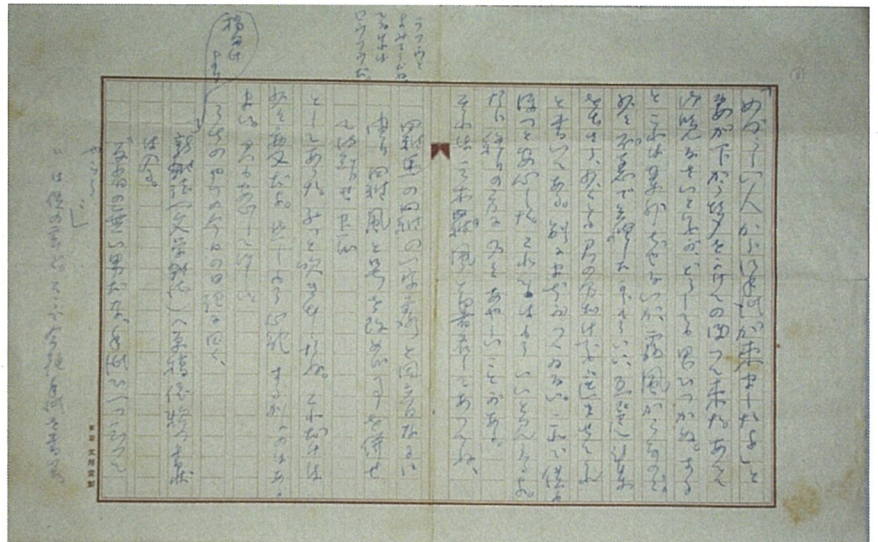
### 3-2-1：前田夕暮あて書簡

個人蔵 ※翻刻は『白秋全集』（岩波書店）35巻329～331頁掲載

白秋が夕暮にあてた書簡です（大正13年（1924）3月20日）。

三木露風から手紙が届いたことや、雑誌『日光』創刊への期待の気持ちが記されています。最後の部分では夕暮の体調を気遣う記述があり、白秋と夕暮の関係の深さがうかがえます。

三木露風は『赤い鳥』にも参加した詩人です。代表作に「赤とんぼ」があります。詩集『廃園』は、白秋の『邪宗門』とともに好評を博し、二人の名前の頭文字から「白露時代」と呼ばれて一世を風靡しました。



### 3-2-2：前田夕暮あて書簡

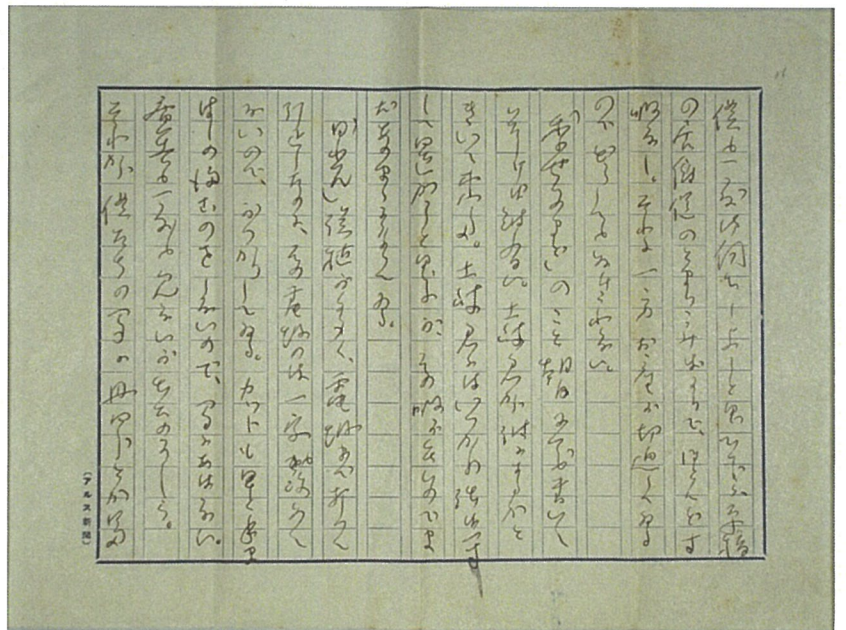
個人蔵 ※翻刻は『白秋全集』（岩波書店）35巻401～403頁掲載

白秋が夕暮にあてた書簡です（大正14年（1925）6月8日）。

前半部では雑誌『日光』に対して、投稿作品が多いことへの不満や、雑誌の運営を少数精鋭で行うべきとの見解が記されています。

「『日光』は総合的のものにしてもっと威張ってほしいと思う」という一節からは、白秋の意気込みが伝わってきます。

後半部では白秋が関わっている仕事について述べられています。詩集や童謡集、歌集や論集など幅広い分野に携わっていたことが分るとともに、「一日二十時間労働では体がつづかない」という一節からは、当時白秋が多忙を極めていたことがうかがえます。



3-2-3: 「夕暮百態」 個人蔵

白秋が描いた夕暮の似顔絵です(大正13年(1924))。夕暮が白秋の山荘を訪ねた際、お酒を飲んで盛り上がった勢いで描かれたようです。全部で数十枚描かれ、一部は雑誌『日光』にも掲載されました。

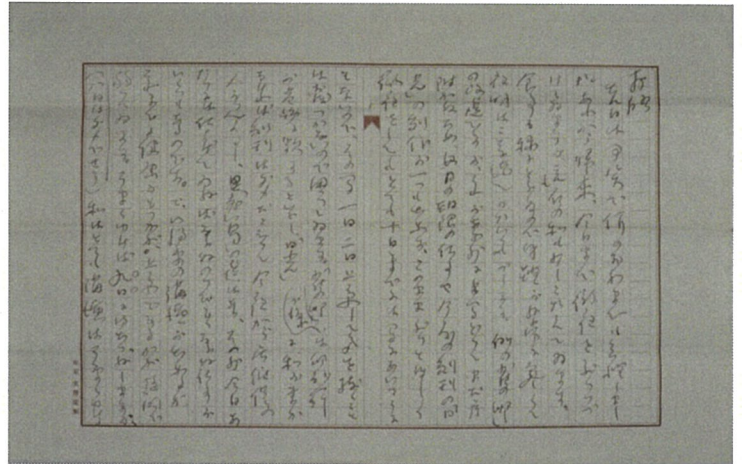


3-2-4: 河野桐谷あて書簡 竹村忠孝氏蔵

白秋が桐谷にあてた書簡です(大正13年(1924)3月4日。翻刻は『白秋全集』(岩波書店)35巻326~327頁掲載)。

桐谷から講演を頼まれたことに対して、多くの仕事を抱えているのでうまくできそうにないため、当日の飛び入り参加ということにしてほしいと返事をしています。

本文中には、葛飾在住時代の作品を集めた『雀の卵』や雑誌『日光』・『赤い鳥』に関する記述もあり、幅広い分野で執筆や選考に携わっていたことがうかがえます。

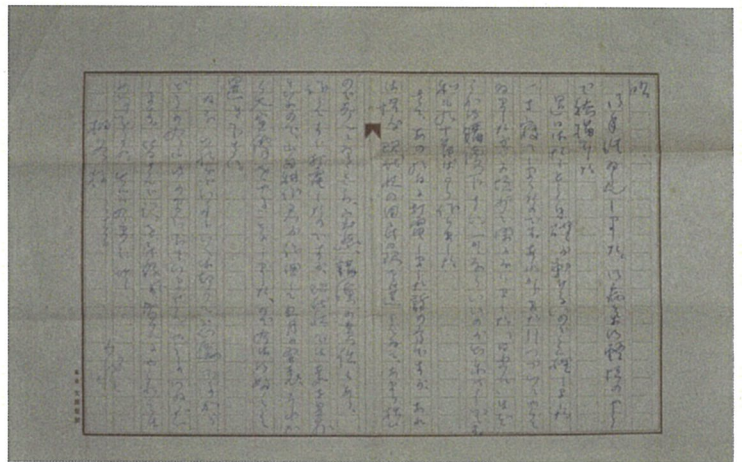


3-2-5: 河野桐谷あて書簡 竹村忠孝氏蔵

白秋が桐谷にあてた書簡です(大正13年(1924)3月22日。翻刻は『白秋全集』(岩波書店)35巻331~332頁掲載)。

前半は雑誌『日光』の購読を勧める内容で、「かなりいいのができそうです。私も九十首ばかり作りました」という一節からは、白秋の自信がうかがえます。

後半は白秋自身が作った詩についての内容で、同年5月に発表され、耕筰が曲を付けた「国民の歌」のことを指していると思われます。



3-2-6: 「国民の歌」(大正13年(1924)5月)

桐谷あての書簡で触れられている作品です。後に、『国民歌謡集 青年日本の歌』(立命館出版部、昭和7年)に収録されました(引用は『白秋全集』岩波書店)。

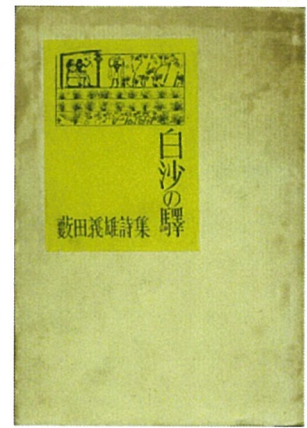
大正13年(1924)1月、摂政宮裕仁親王(後の昭和天皇)が久邇宮良子(後の香淳皇后)と結婚式を挙げました。「国民の歌」は天皇や皇太子を讃える内容となっており、この結婚を受けて作られたものと思われます。

<p>5          彌栄 おお、幸あれ、われら国民。          彌栄 おお、幸あれ、われら国民。          彌栄 えあれや。</p>	<p>4          彌栄 おお、恵めよ、海の果まで。          彌栄 おお、恵めよ、海の果まで。          彌栄 えあれや。</p>	<p>3          彌栄 おお、伝へよ、うまし山川。          彌栄 おお、伝へよ、うまし山川。          彌栄 えあれや。</p>	<p>2          彌栄 おお、よろこべ、わかき光を。          彌栄 おお、よろこべ、わかき光を。          彌栄 えあれや。</p>	<p>1          彌栄 おお、崇めよ、天皇を。          彌栄 おお、崇めよ、天皇を。          彌栄 えあれや。</p>	<p>国民の歌          山田耕作曲</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------

3-2-7: 『<sup>はくさ</sup>白沙の驛<sup>えき</sup>』 (アルス、昭和13年(1938)) 当館蔵

藪田の処女詩集です。タイトルは藪田が「郷里小田原の感じをよく表している」と考えた<sup>とほ</sup>杜甫の漢詩「宿白沙驛」を基にしています。

この詩集には白秋が序文を寄せています。序文は6つの部分に分かれていて、各章の冒頭で「藪田君」と呼びかける形式になっています。「君の生れの郷、白沙の驛は(略)私の臉のうらにも、忘れ難い白い映像となって響いている。(略)思うとあの山の上の、十年にも近い詩の生活であった。(略)その頃に初めて見た君の純情の瞳ではなかったか」という一節からは、小田原の地や藪田に対する白秋の思い入れがうかがえます。



3-2-8: 『評伝 北原白秋』

(玉川大学出版部、昭和48年(1973)) 当館蔵

藪田の作品で、白秋の生涯や作品が時系列に沿って記されています。

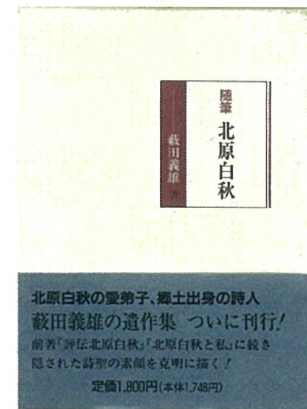
この評伝の特徴は、随所に藪田自身がつけた日記が参照されている点です。藪田は弟子として白秋に師事するとともに、秘書としても白秋の家に出入りしていたことから、白秋の業績だけではなく、人となりもうかがえる内容になっています。



3-2-9: 『随筆 北原白秋』

(小田原市立図書館、平成4年(1992)) 当館蔵

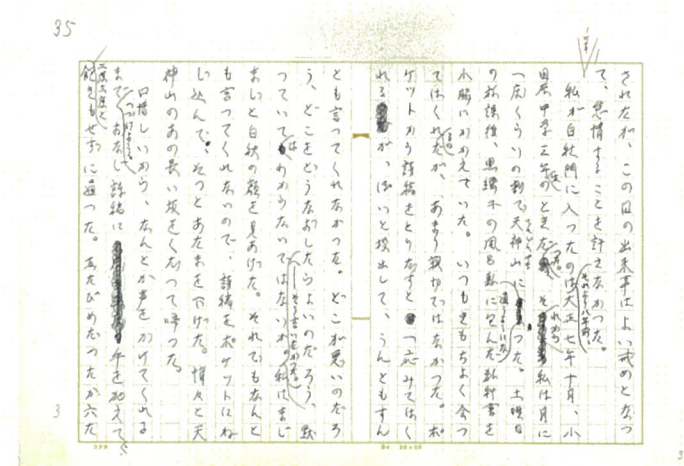
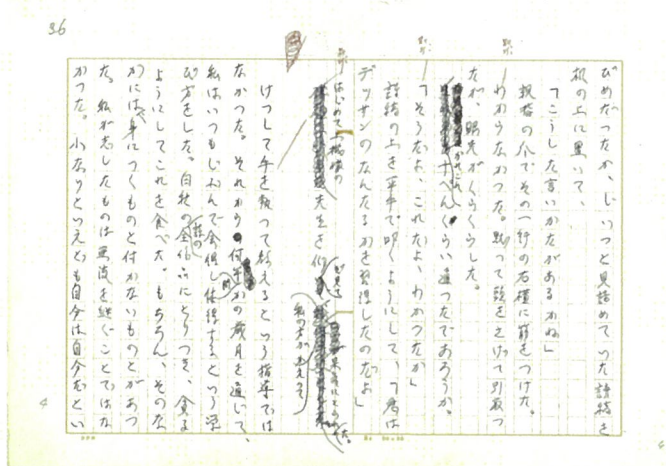
藪田のエッセイ集で、藪田の死後刊行されたものです。「随筆 北原白秋」と「我が周辺」の二部構成になっています。前半では白秋や白秋に関わった耕筰らについて記されるとともに、後半では同じ白秋門下の詩人・大木惇夫の<sup>おおきあつお</sup>ことや、白秋が「純正で殉情の詩徒」と評して期待しながらも若くして亡くなった小田原出身の詩人・<sup>ふかわけいぞう</sup>府川恵造のことが書かれています。



3-2-10: 『随筆 北原白秋』原稿 当館蔵

『随筆 北原白秋』の直筆原稿です。

掲載部分は、藪田が白秋に詩の指導を受けている場面です。白秋は手取り足取り指導をせず、弟子が自ら気づき、創作方法を会得することに重点を置いていた様子がうかがえます。



## 主要参考文献

- ・『白秋全集』岩波書店、各巻
- ・『日本近代文学大事典』講談社、各巻
- ・『岩波講座 日本文学史』岩波書店、各巻
- ・園部三郎・山住正己『日本の子どもの歌 一歴史と展望一』岩波書店、昭和 37 年
- ・『日本詩人全集 7 北原白秋』新潮社、昭和 42 年
- ・藪田義雄『評伝 北原白秋』玉川大学出版部、昭和 48 年
- ・藤田圭雄『日本童謡史 I』あかね書房、昭和 59 年
- ・『近代日本の詩聖 北原白秋』北原白秋展専門委員会ほか、昭和 60 年
- ・『国文学 解釈と鑑賞』50-13、至文堂、昭和 60 年
- ・『新潮日本文学アルバム 北原白秋』新潮社、昭和 61 年
- ・佐藤通雅『北原白秋 大正期童謡とその展開』大日本図書、昭和 62 年
- ・前田夕暮『近代作家研究叢書 51 白秋追憶』日本図書センター、昭和 62 年
- ・木俣修『近代作家研究叢書 74 白秋研究 I 短歌編』日本図書センター、平成元年
- ・木俣修『近代作家研究叢書 75 白秋研究 II 白秋とその周辺』日本図書センター、平成元年
- ・石井富之助『小田原と文学』小田原文芸愛好会、平成 2 年
- ・藪田義雄『随筆 北原白秋』小田原市立図書館、平成 4 年
- ・中村真一郎編『近代の詩人五 北原白秋』潮出版社、平成 5 年
- ・湯浅浩「白秋と「木兎の家」」(『おだわら 一歴史と文化一』6、平成 5 年)
- ・『作家の自伝 27 北原白秋』日本図書センター、平成 7 年
- ・北原東代『白秋の水脈』春秋社、平成 9 年
- ・坪井秀人『声の祝祭 日本近代詩と戦争』名古屋大学出版会、平成 9 年
- ・河原和枝『子ども観の近代 『赤い鳥』と「童心」の理想』中央公論新社、平成 10 年
- ・柳田泉・勝本清一郎・猪野謙二編『座談会 明治・大正文学史 (6)』岩波書店、平成 12 年
- ・北原東代『立ちあがる白秋』燈影社、平成 14 年
- ・ハーバート・ビックス著、吉田裕監修『昭和天皇』上・下、講談社、平成 14 年
- ・北原東代『沈黙する白秋』春秋社、平成 16 年
- ・『国文学 解釈と鑑賞』69-5、至文堂、平成 16 年
- ・『湘南文學』5、湘南短期大学、平成 17 年
- ・『日本の童謡 白秋、八十一そしてまど・みちおと金子みすゞ展』図録、県立神奈川近代文学館、平成 17 年
- ・三木卓『北原白秋』筑摩書房、平成 17 年
- ・北原隆太郎『父・白秋と私』短歌新聞社、平成 18 年
- ・北原隆太郎『父・白秋の周辺』短歌新聞社、平成 19 年
- ・奥中康人『国家と音楽 伊澤修二がめざした日本近代』春秋社、平成 20 年
- ・中路基夫『北原白秋 一象徴派詩人から童謡・民謡作家への軌跡一』新典社、平成 20 年
- ・川本三郎『白秋望景』新書館、平成 24 年
- ・中野敏男『詩歌と戦争 一白秋と民衆、総力戦への「道」一』NHK 出版、平成 24 年

### 凡例

- ・この小冊子は平成 24 年 (2012) 10 月 20 日 (土) ~12 月 26 日 (水) を会期として小田原文学館で開催する同名展示の解説書です。
- ・本展開催及び本冊子作成にあたり石丸麗子、北原白秋生家・柳川市立歴史民俗資料館、県立神奈川近代文学館、竹村忠孝、前田宏の各氏・機関よりご協力を賜りました。ご芳名を記し、感謝申し上げます。
- ・本冊子の編集及び執筆は小田原市立図書館学芸員の鈴木一史が行いました。
- ・史料引用の際、適宜新字体等に改めた箇所があるとともに、敬称等は省略しました。
- ・展示内容と本冊子の掲載内容は異なる場合があります。

平成 24 年 10 月発行 小田原市立図書館 (禁無断転載)